


1 研究の内容

本部会のテーマである「食をみつめる 自分をもつめる」は、子どもたちが多様な視点で食をとらえる経験を重ね、そうした中で自分の食をふり返り、自分の食事の課題に向き合いながら、自分や自分の生きる社会にとってよりよく、心地よい食を考え続ける姿を目指す。

本校は、新領域「てがつく創造活動」を中核として教育課程全体でメタ認知スキル・社会情意的スキルを育成することを研究開発課題としており、各教科の学習で育成されるこれらのスキルについても検討している（P7～16 参照）。各教科の食に関する学習、栄養教諭が関わる活動や日々の給食時間など、食育を通して育みたい姿を2つのスキルの視点で整理したものを以下の表に示す。他者と関わり、今まで意識していなかった事柄に目を向けたり、自分の経験と照らし合わせたりすることでその違いや自分の食べ方に

気づく。個の学びと協働的な学びが行ったり来たりしながら、自分（たち）の食を考えていく。食に関する様々な経験をあみ糸として、自分の食を考え、

表1 食育で育みたい子どもの姿（メタ認知スキル、社会情意的スキルへの着目）※ a～fについては後述

	メタ認知スキル	社会情意的スキル
 <p>個による 学びの場面</p> <p>協働的な 学びの場面</p>	自分の食生活の課題をとらえ、 原因や改善案を考えることができる	食べ慣れていないものや苦手なものに ←(e) 少しずつ向かう柔軟さをもつことができる (食の)課題にねばり強く取り組むことができる
	自分の食事と、社会や環境とのつながりを考えることができる 経験やいくつかの情報をもとに、自分(たち)の食を思い描くことができる ←(c)	↑(d) 様々な料理や、食事をする空間を 楽しむことができる
	食文化や好みの違いに気付き、尊重できる ←(f) 他者も心地よく食事ができるように考え、行動することができる ←(a)	
	他者との関わりから自分の食をみつめなおし、必要に応じて更新することができる ←(b)	

思い描いていく姿は、本校の研究全体テーマである「学びをあむ」に通じるものである。

ここ2年ほどは感染リスクに留意しながら、一人ひとりの食の楽しさや自分ごととして給食を食べることなど、個の学びに重点をおいた実践を行ってきた。しかし、これまでの研究から、自分の食をふり返り、考え続けるためには、活動の中で子どもたちが互いに考えを聴く時間を十分にとることの必要性を感じている。今年度は、必要な感染対策を継続しながらも、協働的な学びの場面に着目して、子どもたちが自分の食をふり返ったり、自分の食生活を思い描いたりする姿をみとっていきたいと考えた。

2 実践からみた子どもたちの姿

(1) カレーチームの活動（2年生）

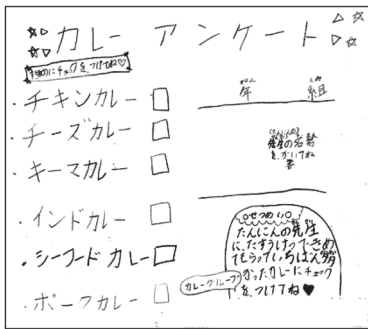
2年生は、学年の時間に個々の興味関心に応じたチームに分かれて活動をしている。栄養教諭は週1回、その中のカレーチーム（9人、二学期から10人）と活動している。このチームは5月の校外学習先で食べたカレーを辛く感じたことをきっかけに「辛くないカレーを作りたい」「ちょっとあまくておいしいカレーを作りたい」という思いがあり、栄養教諭との相談で、給食に自分たちの考えたカレーを出すことを目標の一つとした。

カレーチームの9人が活動当初に話していたこと(6月8日栄養教諭の聞き取りメモより)

からくないカレー おいしいカレー
 ちょっとあまい おとな味じゃない
 あまくちみたいな
 がっこうでつくりたい きゅうしょくでつくりたい
 かくしあじ キムチ あぶら
 こまつなを入れてみたい
 はちみつ りんご みかん フルーツけい
 あまい
 インドカレーをしらべる キーマカレー
 ポーク チキン チーズ からいカレー

①子どもたちの姿 ア:「みんな」の意見を取り入れようとする姿

どんなカレーを考えていくか話す中で、子どもたちから「(全学年に)アンケートをとりたい。」と声が挙がった。栄養教諭は「まずは2年生に聞いてみたら？」と提案したが、子どもたちは着々と全校向けアンケートの準備を進めていた。各クラスに1枚のアンケート用紙を配付し、いくつかのカレーか



カレーチームが作ったアンケート

ら一つ選ぶという内容で、7月に各教室へ依頼に繰り返した。その後カレーの隠し味を考える過程でも再び「アンケートとろう！」という意見や「1年生にも聞かないと。」といった声があり、他学年の希望を取り入れようとする姿があった。9月中旬、アンケートの結果からチーズカレーを土台に考えていくことが決まった。

イ：経験をもとに自分たちの思い描くカレーを形にしていく姿

10月下旬からはクラスごとに5人ずつ、A組チームとB組チームに分かれて考えることになった。A組チームはカレーの具を決めた

- ・ローリエ
- ・生クリーム
- ・おろしりんご
- ・チャツね(ジャム)
- ・インスタントコーヒー(少し)
- ・チョコ
- ・にんにく(みじん切り)
- ・しょうが
- ・赤ワイン
- ・はちみつ
- ・ヨーグルト
- ・トマトジュース
- ・クミンシード
- ・チーズ

A組チーム 隠し味のリスト

あと、隠し味のリストを作り、どれを入れるか考えた。まず、家で試した経験やそれ自体の甘いイメージから、はちみつを使うことが決まった。次に「生クリームは入れて食べたことがあってなめらかな感じ。(A児)」「生クリームとヨーグルトをそれぞれ入れて食べたら、ヨーグルトの方がおいしかった。(B児)」と2つの乳製品が候補に挙がった。C児も2つの食品を加えたときの味わいを話していた。C児に、家で試したの?とたずねると「カレーチームになってからみんなが(隠し味を)入れているのを知って、家でやってみたくなくなった。」と言う。

チーズを含めると3つの乳製品がカレーに入ることや、D児が「ヨーグルトを入れたことがないからわからない。」と話していたことから、イメージを共有するために学校で試食する機会を設けた。ピザ用チーズを混ぜたレトルトカレーに、はちみつ、生クリーム、ヨーグルトの3つを少しずつ載せて食べた。試食のあと「(隠し味を)3つとも入れる」で一度5人の意見がまとまったが、直後にD児は賛成を取り下げた。理由を聞くと「とろーりすぎた。」と言う。「はちみつとヨーグルトと生クリームの全部がとろーりするじゃん。チーズもとろーりする。チーズと生クリームとヨーグルトとはちみつとカレーがとろーりするから、とろーりが5こあるからどうかなあって。」D児の考えから、隠し味を加えたときにちょうど良いとろみになるよう、給食では水分を多めにしカレーを作ることになった。

②実践をふり返って

給食に出した日の昼休み、A組チームの子どもたちが興奮気味に栄養教諭のもとにやってきて感謝の言葉を繰り返し「おいしかった!おいしかった!」と5人で喜びを分かち合う姿があった。D児はこの日のことを「みんながおかわりをしてくれました。うれしかったです。(中略)一学きからかなえられなかったゆめがやっとかなえられたのでうれしいです。」と書いていた。後日、活動の感想を聞くと「(大変だったのは) 具材や隠し味を決めるところ。候補がいっぱい出て決めるのが大変だった。」「出したって言って(実現)できたから、達成感があった。」「カレーチームを続けて、今度はカレー味のほかの料理を作りたい。」と話していた。



12月に出した「2年A組カレーチーム スペシャルカレー」

子どもたちは他学年の希望を取り入れようしたり、友達の話から家で隠し味を試してみたり、自分たちが感じたことからよりよいものを作り出そうとしたりしていた。カレーを考える過程では、時間がかかっても全員が納得できるまで話し合う姿があり、経験をもとにした一人ひとりの思いや気づきが給食に反映されていった。これらは前頁、表1の(a)~(d)の姿ととらえることができる。

(2) 食べものがたりをききあおう(3年生)

3年生はコロナ禍に入学し、感染対策のもと学校生活を送ってきた。子どもたちの共通体験である給食をふり返り、聴き合う時間を設定することで、自分の成長や嗜好に気づき、また友達の意外な一面を知ることができるだろう。聴き合うことを楽しみながら、自分の食事をふり返り、今後の給食や自分の食事と向き合う芽を育みたいと考えた。「食べものがたり」は湯澤規子の著書⁽¹⁾の中で使われることばで、一人ひとりの食べ物にまつわるエピソード



を指す。ここから着想を得て「給食の食べものがたり」を聴き合う時間とした。

①子どもたちの姿

「食べものがたり」と板書すると「食べ物の、物語？」とイメージを持ち始めた。あの料理を食べると思い出す、といった給食に関わる思い出や、1年生の頃と比べて変わったと思うことを「給食の食べものがたり」としてプリントに書いてみようという提案をした。「思いつかない。」「給食のこと、なんとも思わない。」という子どもも、数人の話を聴くと「好きな給食の話でもいいの?」と書き始めた。

- ・2年生のとき、きれいなタケノコを3年生になっておもしろく食べてみたらあんが味がしなくて食べられるようになった。
- ・1年のときは、小さかったのできゅう食が多く感じたけれど、だんだん食べていくにつれて、おかわりの回数もふえていっぱい食べられるようになった。3年ではぎやくにすこしたりない気もした。
- ・きゅう食でかぶがきらいでもおかわりしたいからがんばって食べた。

(子どもたちの記述から)

書いたものを3～4人で質問しながら聴き合う時間をとり、その後全体で共有した。

<p>T(授業者):いいなと思った友達の食べものがたり、紹介してくれる?</p> <p>C1:C2の好きな給食ランキングベスト3なんですけど、その1位がぼくのおすすめで「2年A組スペシャルカレー」で…。</p> <p>C3:あ、わかるー!</p> <p>C1:質問して聞いてみると、カレーはあんまり好きじゃないんだけど、それだけ好きって。</p> <p>T:ええー。聞いてみたいね。 (中略)</p> <p>T:「2年A組スペシャルカレー」は、さっき(C1が)カレーが嫌いなのにそれが1位だったって言っていたんだけど、カレーはあんまり好きではないの?</p> <p>C2:はい。</p>	<p>T:どうして「2年A組スペシャルカレー」が1位なんですか?</p> <p>C2:そんなにからくもないし。ぎやくにあまかった。</p> <p>T:C2に誰か質問したいことある人?</p> <p>C4:ぼくはほんの少しだけピリッってしたんだけど。</p> <p>C5:えー。</p> <p>C6:どこが?</p> <p>C4:ぼくはほんの少しだけからかっただけけど…。</p> <p>C2:それだったら家の方がたぶんピリッってくる。</p> <p>T:カレーって、人によってからいなあって思う人と全然辛くないなあっていう人がいるので、時々給食も辛さの調整をしています。ほか、C2に質問。</p> <p>C7:どれくらいあまかった?</p>
---	--

(全体で共有している場面の一部、下線は筆者)

②実践をふり返って

子どもたちのふり返り

- ・C2が、カレーがにがてなのにカレーが食べれたというのにびっくりしました。・カレーも感じ方がちがうとわかってふしぎ。
- ・C8の1年生(のとき)にはサラダが全然食べられなかったけれど、3年生になって食べられるようになってすごかった。
- ・おかわりが早い人でもにがてなものはあるんだなあ。
- ・みんないろんなことがしんかしたりしていいなあと思いました。わたしもぎゅうにゅうがのめるようになりました。

C2のプリントには料理の好きな理由は書かれていなかった。C1が質問したことで理由が明らかになり、C2の話から他の子どもたちも辛さの感じ方に目を向け始めた。C2自身も、友達の質問を通して食べた時のことを改めてふり返っており、同じ料理を食べているからこそ共感や疑問(下線部)が表れている。ふり返りからは友達の意外な一面に驚いたり、苦手なものを克服したことを讃えたりする様子や、感じ方の違いへの気付きを読み取ることができた。これらは、表1の(e)や(f)の姿につながっていく可能性が感じられた。友達の話を通して給食や自分の食事をふり返る視点を増やすことは、自分の食を思い描くための芽ととらえることができる。

3 今後に向けて

表1に示す子どもの姿は、様々な視点から食をみつめる経験を重ね、友達などの他者と継続的に関わる中で育つものと考えている。今年度は3年生の一時間の活動と、2年生と半年以上関わるなかで見えてきた姿を考察した。今後は複数回の食育の活動を通した子どもの姿をみとっていくことと、6年間を見通した活動を考えていきたい。

上田(2021)は著書の中で「食育とは、善き食生活を不断に『探求』できる食べ手を育むこと」ととらえ、善き食生活とは人生の各ステージで変化するものであるから、その具体的な局面で善き食生活をその都度探求できる「善き食べ手」を育てていくことを述べている。何を食べていきたいのかを、個々が考えていくための素地を作り、ふり返る機会を作っていくこと。子どもたちが考えや経験を聴き合うことを意識して今後も活動に取り組んでいきたい。(足立)

参考・引用文献(1)湯澤規子(2022)「食べものがたりのすすめ『食』から広がるワークショップ入門」農山漁村文化協会
(2)上田遥(2021)「食育の理論と教授法-善き食べ手の探求-」昭和堂 ※引用P319